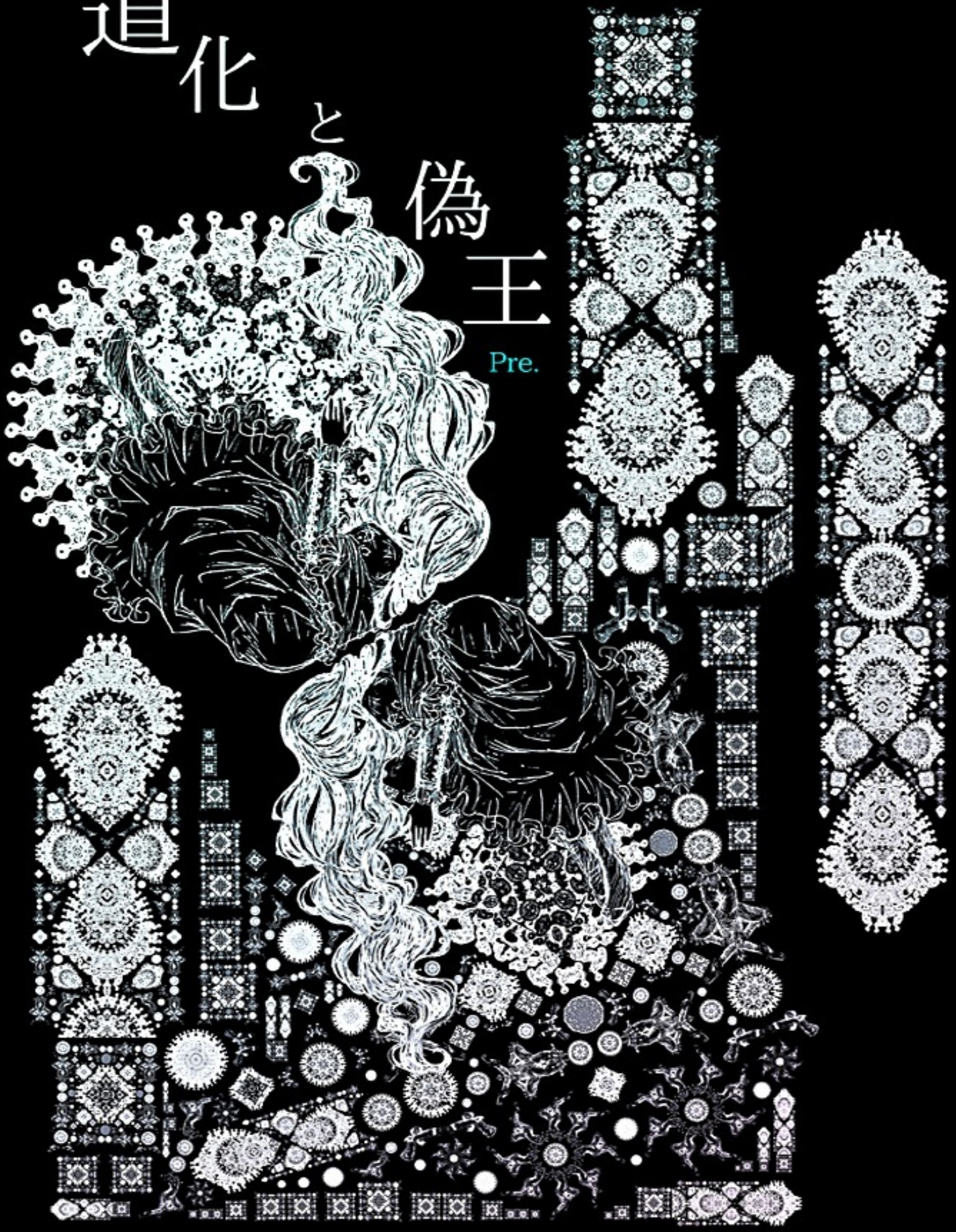
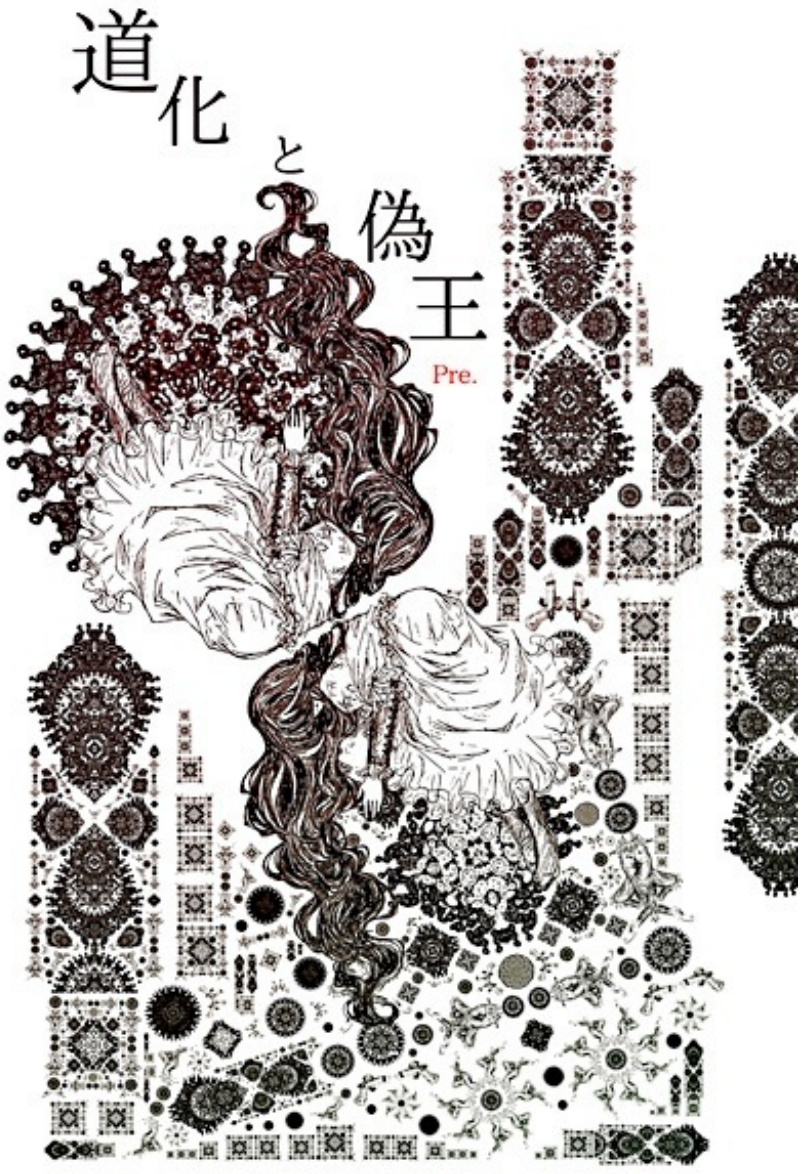
道化と偽王

Pre.




道化と偽王
Pre.

道化と偽王

南風野さきは

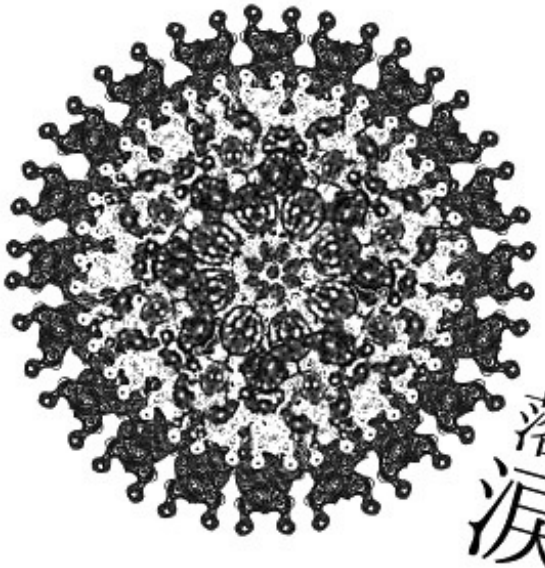
片足靴屋/Sheagh sidhe

夜明け前に、時ならぬ雪が激しく舞い、辺り一面に降り積もった。森の生き物は雪を目にして逃げ去った。しかし太陽が帰還し、松葉から硝子の粒が滴った。

道化と偽王 目次

落涙と非番　5
異装と亡霊　17
道化と偽王　35
真珠　55

【冒頭引用】
タニス・リー著 市田泉訳『薔薇の血潮 上』東京創元社 2013年
【各章冒頭引用】
アト・ド・フリース著
山下主一郎 主幹
荒このみ　上坪正徳　川口紘明　喜田尾道冬　栗山啓一　竹中昌宏
深沢俊　福士久夫　湯原剛　共訳
『イメージ・シンボル事典』大修館書店 1984年



落涙と非番

【two 2】

2　区別.抵抗を表す.

3　原初の物質を表す.

街を抱いて蛇行する川は夜そのものの色をしていた。ゆるやかな流れに瞬く灯火は明滅する艶となり、煌きの遊ぶ川面には月の写し身が落ちている。漣に歪められた月光は砕けて散じ、反射する街の灯と混じり合い、光の欠片となって踊っていた。

水面の弾く街の灯が、ひとつ、またひとつと消えていく。そこにゆらめくものが月の鏡像だけになった頃、水の中を上流から漂ってくる炎があった。

炎は人のかたちをしていた。

水流を蓋として、炎でできた頭と胴と四肢が、浮きあがることも沈むこともなく流れてくる。水中で燃え続ける炎の芯は、松脂に浸した木材と藁で組みあげられた、巨大な人形だった。

その昔、この街を騒がせた放火魔を模したものが、この人形であるとされている。

俺はこの街の生まれではないし、街の歴史に興味があるわけでもないので、逮捕されたそいつがこの人形と同じように炎ごと川に棄てられたのかどうかは知らない。だが、毎年、祝祭の度に人形はつくられ、燃やされ、流されていく。

あの時、俺は川沿いの倉庫街にいた。だからこそ、水に放り投げられてからは見向きもされない祝祭の残滓のようなそれを、間近で見ることができた。

ひとがたの巨大な炎が目の前を流れていく。かたちの際を舐める炎は鮮やかだった。炭化した藁が炎に纏わりつき、泡のごとく浮上して水面にこびりつく。やがて、それまでかたちを崩すことなく燃えていたひとがたはふたつに割れた。水に鎖されたまま、人形は大小ふたつの炎の塊になった。胴から離れた首が、流されるままに胴を追い抜き、先遣りのごとく遠のいていく。

なんだ後輩、そんなことを聞きたいわけではないといった顔をしているな。だが、あの時、俺が倉庫街にいたのは偶然だ。おっと、そんなに怖い顔をするな。おまえの聞きたいことをがんばって思い出すことにするから、その間に珈琲でも調達してこい。ここは俺の職場だが、それだけに、いくら見慣れたところで殺風景すぎる。珈琲一杯分のぬくもりくらい恵んでくれ。カメラは回ってますから安心してください、って、おまえ毒でも盛るつもりか。これはただの事情聴取だ。

いつになく機嫌が悪いって？　あのなぁ、連続勤務にもほどがあるという理由で無理に取らされた非番の日にこれだぞ。不機嫌にならずにいられるか。なに、怒っているわけじゃない。ちょっとばかし拗ねてみただけだ。何があったのかはきちんと話すさ。なんだ。そんなことはどうでもいい

んですが、せっかく祝祭の日がお休みだったのに、たとえ理由が事件に巻きこまれたかもしれないというものであっても、約束を反故にされて文句を言ってくれるような相手のひとりもいない先輩が憐れでなりません、だと。後輩よ、殴るぞ。おお、珈琲ありがとうな。

さて、どこから話をしたものか。

今はもう日付が変わってしまっているから、昨日のことになる。

おまえも知っているように、昨日、俺は非番だった。前日の勤務からの帰宅が明け方であったこともあって、目が覚めたのは夕刻一歩手前という頃だった。掃除と洗濯が満足にできなかったことは残念だが、職場からの呼び出しはなかったし、休日としては上々だろう。それで、どうしたかな。そうだ。ひとまず腹に入れるものをとパンケーキを焼いたんだ。パンケーキを貪っていたら、外がにぎやかなことに気がついた。窓越しに街を眺めてみて初めて、その日が祝祭だったということを思い出したんだ。

俺の家は、高台というわけではないが、街の中心たる広場を見下ろせるくらいのところにある共同住宅だ。つまり、俺の家の窓からは、それなりに街を見渡せる。

その日、街の通りという通りを埋め尽くしていたのは、金糸銀糸の煌く衣装を纏い、仮面で顔を

隠した人々だった。数百年前に描かれた肖像画から抜け出してきたかのような奴らが踊り狂ってて、夕陽に蠢く夢の住人みたいだった。

外を眺めながらぼんやりしていたら、いつしか夜になっていた。

色とりどりの灯が街にゆらぎ始めた。祝祭に繰り出してる奴らが掲げてる角燈の放つ光の色は、緑やら赤やらてんでばらばらだ。広場の一辺を成す市庁舎の屋根からは、巨大な男の頭が突き出ていた。王侯のように着飾った、頭に王冠を戴いた大男の人形だ。曳き車に鎮座する大男の王冠を飾る花は、松明の炎に照らされて、白銀に黄金に瞬いていた。

花飾の王冠が動き出す。車が曳かれ、人形が街を廻り始める。松明が、角燈が、祝祭に興じる仮装の群れが、人形を追いかける。

その時、音が聞こえたような気がしたんだ。

振り返って部屋を見渡してみたが、独り者の家だ、俺の他に誰かがいるはずもない。だから、窓を開けてみた。遮るものがなくなったからか、横笛の鳴りや弦の爪弾き、太鼓や平鍋の叩かれる音、調子外れの歌といった祝祭の騒音が、俺を叩きのめすように耳を抜けていった。

だが、先刻、俺の耳が拾ったのはそれらとは違う音だった。

俺は窓から身を乗り出し、周囲を見回してみた。

あの辺の道は入り組んでいる上に細いんだ。だから、建物と建物の間隔が狭い。よその家の窓に

祝祭の行進を眺める家族がいるのは目に入るんだが、上から道を覗きこんだところで近場の家の壁が視界を塞いでしまう。そういったこともあって、窓から外を眺めてみたが、俺の探している音の源は見つけられなかった。寒かったし、音の溢れる祝祭の夜だ。気のせいだったかと窓を閉めようとしたところに、また、あの音が聞こえてきた。

俺は閉めかけていた窓を開け放ち、風に運ばれてくる泣き声を頼りに、夜の闇に目を凝らした。

そうやって俺はあの子を見つけたんだ。黒髪を闇に融かし、肌の白だけが夜にひどく浮いている、あの幼子を。

最初は迷子だと思ったんだよ。親とはぐれたのか、親を見失ったのか。

どちらにせよ祝祭の夜だ。

街はいつもより人が多い。しかも普段とは様相が違う。街を挙げて夢に浮かされてるようなもんだ。そういうわけだから、迷子といったって、普段よりも一層、自力でどうこうできるような状況じゃない。場合によっては署で保護した方が親御さんも見つけやすいだろ。

だから、非番の日に職場なんぞ目にしたくはないが、俺は制服の外套を鷲掴み、夜の街へと駆け出していったわけさ。

裏路地に辿り着くと、窓から見つけたのと同じ場所で幼子は泣いていた。真珠のような大粒の涙が、間断なく、幼子の頬を転がり落ちていた。

幼さゆえの愛らしさなどどこにもない、怖気のはしるほどにうつくしい子供だ。

「どうした？」

そう声をかければ、涙に濡れた星空みたいな目を幼子は俺に向けてきた。

「かあさんを、さがしているの。また、家からいなくなっちゃった」

やわらかくちいさな唇から、鈴をばら撒いたかのような、涼やかで雑然とした、澄んだ音が散らばった。

ひとまず、俺は幼子の名前を聞き出そうとした。だが、どうにも要領を得なかった。その間にも、幼子の目からは涙がとめどなく溢れ、頬を伝い落ち続ける。それなのに、泣き腫らした瞼の下から俺を見つめてくる目はどこまでも静謐で、底が知れない。

果てのない星空みたいな幼子の目に呑まれかけた俺は、視界にちらついた華奢な白によって我に返った。幼子の剥き出しの四肢は冷気に強張っていて、飴細工のように脆そうな肩は赤みを帯びている。俺は着ていた外套を脱ぎ、幼子の肩に掛けてやった。

「お母さんの行きそうな場所　わかるか？」
「炎を見つければいい。きっと、そこにいる」
疑念しか生まない返答に、俺は眉根を寄せた。幼子は羽織らせた外套をちいさな手で握り締めた。くたびれていても白い外套が、幼い手に握られて皺をつくる。
「一緒に捜してやるよ」
笑顔のようなものをつくって、俺は幼子に頷いてみせた。
「街は祝祭で浮かれきってるしな。あんたみたいな子、ほっとけないさ」
涙で艶めく目を輝かせ、幼子は満面の笑みを弾かせた。

それから俺は幼子を追いかけることになる。
母親の行き先に心当たりがあるというのは本当だったらしい。手でも繋いで案内してくれるのかと思いきや、幼子はひとりで先に駆けていく。
幼子の羽織る外套の白が、入り組んだ石畳の隘路に翻る。残像を頼りに俺は幼子を追いかける。
気がつけば、街を一望できるくらいの高いところに、俺たちはいた。
街を廻っていた人形は行進の起点である広場に戻っていた。人々が人形に群がって、豪奢な衣装

を剥ぎ、王冠を毟り取っていた。毎年のお決まりだな。だから、人形がこれから川に運ばれていくということも、俺は知っていた。

幼子が声をあげた。

「かあさんだ」

俺の傍らで、幼子は街の下方を――川沿いの倉庫街を――指さした。

炎だ。

燃え盛る炎を目指し、幼子が駆け出す。嬉しそうに笑いながら幼子は坂をくだっていく。嬉しそうにしているくせに、泣きやんではいない。

その後はおまえも知っているとおりだ、後輩。

俺は消防と署に連絡を入れた。俺が祝祭の日に非番になった直接の原因である、一連の放火事件のひとつかもしれなかったからな。

倉庫街のあの区画、例の男のものだっただろう。土地であれ建物であれ、道であれ物であれ、今まで出火したもののほとんどがあの男の持ち物であったことは、同じ事件を担当しているおまえも知っているはずだ。

あの男――この街の頂に館をかまえている、一代で巨万の富を築いた男。本人にその気がなくとも、自覚があろうとなかろうと、恨み事のひとつやふたつ、廻り廻って買っているだろうよ。

連絡先の人員が駆けつけるまで倉庫街では何が起きていたのですか、か。それについては、とりとめもない話になる。

あの夜の俺は、母親のしるしを見つけて駆け出した幼子を追っていたわけだ。迷路みたいな街を、石畳の坂を、柄にもなく全力で駆けおりていった。裸の人形を曳いて川に向かう行進の松明が揺れていて、乾いた夜気に炎が逆巻いていて、祝祭の熱と横溢が湧き踊る夜に翻る白は外套だとわかっていても鳥の翼みたいだった。

白の鳥に導かれた先があの倉庫街で、骨組みを残して燃え崩れる倉庫の前に、女がいたんだ。幼子をそのまま大きくしたかのようなその女は、黎明とも斜陽ともつかない黄金を湧き立たせる炎を、天高く昇っていく煙を、満足そうに眺めていた。

陶然と炎を仰いでいる女に幼子が寄り添う。幼子のその様は、待っているようでも甘えているようでもあった。

新たな炎が燃えあがる。川の上流に眼を遣ると、全身に炎を纏った巨大な男の、黒々とした影が屹立した。

炎のうねりと燃え融ける建材の軋み、煙の渦と煤の舞いを貫いて、豊饒そのもののような、慈雨

に潤んだ声が俺の耳に突き刺さる。
「わたしの声は、あのひとに届いたかしら。あのひとはわたしに眼をむけてくれたかしら」
燃え盛る人形が川に棄てられた。水音があがり、派手に散った水飛沫が松明の炎を弾く。
祝祭を屠る葬送曲が、途切れ途切れに風に運ばれてくる。
街は廻りをひとつ新たにした。
騒がしい夜は次の祝祭までおあずけだ。

道化と偽王

著者　南風野さきは

発行　片足靴屋/Sheagh sidhe

発行年月日　2016/06/12

初出　「片足靴屋/Sheagh sidhe SAMPLE 2015」(小冊子/Puboo) 2015/07/19

http://p.booklog.jp/book/99755

HP　片足靴屋/Leith bhrogan

http://id12.fm-p.jp/20/LIR/

Twitter　@SAKIHA_HAENO

tumblr.　http://sakiha-haeno.tumblr.com

印刷所　コミックモール(文伸印刷株式会社 内)

http://comicmall.jp

著作権は著者に帰属いたします。

この物語はフィクションであり、実在の人物・地名・団体とは一切関係ありません。

道化と偽王(Pre.)

http://p.booklog.jp/book/105790

著者：片足靴屋/Sheagh sidhe
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/leithbhrogan/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/105790

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/105790

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ